

藤原為真小論

築 瀬 一 雄

(1) 藤原為真は、別稿に論じた藤原範綱の従兄弟である。作者部類に、

為真五位肥後守・信瀨守藤原水夷男（詞花） 雜上一（千載） 恋四一

とあり、尊卑分脈の註記には、「或為実。従五下、藏、肥前守、母上総介惟輔女」とある。（中宮亮顯輔家歌合の作者付にも、前肥前守為真とあるから、肥前守が正しいのであらう。）典型的な受領家の群小歌人と言ふべきである。

永万二年（一六六）の中宮亮重家朝臣家歌合には、生西として出詠し、その作者付に、「生西為真入道」とあるので、この時には既に出家してゐたことは判るけれども、その理由と年月日は未詳である。（永万元年成立と言はれてゐる、今撰和歌集では、「肥前守為真入道」としてある。この頃の出家か。）

次に、為真の名の記し方について、注意しておきたい。尊卑分脈にも、「或為実」とある通り、真を実とした場合も、同人であらうと思はれる。元永二年七月の内大臣家歌合は、新校群書類従第八巻と、類聚歌合との両方に取められてゐるのであるが、その作

者付に於て、前者は為実とし、後者は為真としてゐる。両方とも歌についた名は「ためさね」と仮名書になつてゐるが、これは勿論同一人である筈である。すると、元永元年十月の内大臣家歌合の作者為実朝臣も同一人と認めてよいであらうと思はれる。（これは、類聚歌合には見られない。）後葉和歌集の場合は、為真となつてゐるが、この歌は、詞花和歌集所収歌と同じであり、それには藤原為真となつてゐる。（詞花集の詞書に父を長実としてゐるが、尊卑分脈では、永実となつてゐる。この永実も金葉・詞花の歌人であつて、詞花集の場合は永実、金葉集の場合は、四首の内一首が、永実となるのである。）又、保安二年九月十二日の関白内大臣家歌合は、新校群書類従第八巻所収のものでは、作者付に「藏人、修理亮為真具載」とあり、五首の内三首は為真、二首は為貞となつてゐる。しかし、類聚歌合所収のものでは、作者付も、歌の読人名も、すべて為真となつてゐるので、この方が正しいであらう。

（註）藤原範綱小論、短歌草原、昭和三年二月号—十二月号

(2)

前項に整理したやうに、ためさね——為真——為実——生西を
同人と見ることが許されるとするならば、その作品は、次のやう
に蒐集することが出来る。

- (一) 内大臣家歌合 (元永元年十月) 1118 三首
 - (二) // (〃 二年七月) 1119 三首
 - (三) 関白内大臣家歌合 (保安二年九月十二日) 1121 五首
 - (四) 南宮歌合 (大治三年九月二十一日) 1128 一首
 - (五) 詞花和歌集 (仁平元年成立) 1131 一首
 - (六) 中宮亮頭輔家歌合 (長承三年九月十三日) 1134 三首
 - (七) 後葉和歌集 (久寿二年五月〜三年五月成立) 1155〜1156 一首
 - (八) 今撰和歌集 (永万元年成立) 1165 四首
 - (九) 中宮亮重家朝臣家歌合 (永万二年) 1166 五首
 - (十) 統詞花和歌集 (治承元年前後成立) 1177 二首
 - (十一) 千載和歌集 (文治三年成立) 1187 一首
 - (十二) 夫木和歌抄 (延慶三年成立) 1310 六首
- この(三)夫木抄については、藤原為真とするものだけを探った。
別に為実、為実朝臣、為実卿とするものが十四首あるが、それは
正三位参議為実であつて、為真とは別人である。(嘉元年間の歌
が多い。) 夫木抄中の為真の歌をその頭註によつて示すと、次の
通りである。(6)は(3)の歌合中のものである。
(6)は(3)の歌合中に頭註に懸れてゐない。
- (1) 元永元年十月内大臣家歌合 1118 一首
 - (2) 保安二年九月内大臣家歌合 1121 一首

- (3) 長永三年九月頭輔卿家歌合 1134 一首
 - (4) 保延元年家成卿歌合 1135 一首
 - (5) 承安三年経正朝臣歌合 1173 一首
 - (6) 名所歌中、扶桑 一首
- かくして、為真の歌は三十五首を蒐集し得た訳であるが、この
中で、重複するものが七首あるので、実数は二十八首と云ふこと
になる。

(3)

元永元年十月の内大臣家歌合 (新校群書類従第八卷) は、判者
が、俊頼と基俊とであつたので、内大臣家兩判歌合とも云はれる
ものである。題は、時雨・殘菊・窓の三題、作者二十四名の各題
十二番計三十六番歌合になつてゐる。

○時雨十二番

左後勝

重基朝臣

柞原紅ふかく染めてけり時雨の雨はいろなけれど

右基勝

為実朝臣

山家「に」は檜のから葉の散り敷きて時雨の音も激しかりけり
俊云。柞原のうたは、露しもなどの紅葉をそめ草木をうつろ
はするは、わぎも子がもすそよりおちたる事なれば、めづら
しげなし。山家のうたは、ならのからはといへる、いとにく
きさまなり。枯葉といはむにつづかずばこそさまいはめ。又
時雨の音はげしといへる事いかが。あち山の高根より、谷
の岩とを見おろしていはむこちする。前の歌や少しまさら

む。基云。左右のうたからはおなじほどなれど、左は時雨のころなくて、偏に紅葉のうたにて侍れば、ならのから葉は今少しまさりてやはべらむ。

俊頼の評の「わざも子が」云々は、「妹が紐とくと結ぶと立田山今ぞ紅葉の錦織りける」(後撰集。原歌は万葉集「妹が紐とくと結びて立田山今こそみぢはじめたりけれ」)を指してゐるものと思はれるが、すべて、言葉の詮索に終つてゐる。殊に為実の歌についての評は、難の為の難に終つてゐるやうである。基俊の評は、題詠の要求の上に立つて言つてゐるので、妥当であらう。さて、右の歌、題詠として、時雨の条件設定も、それによつて構成された世界も極めて平凡であり、感動と云ふべきものは稀薄である。平板な説明調の歌に終つたのは、「……には……:……かりけり」と云ふ風な底の浅いリズムに依存してしまつたからである。

○残菊十二番

左

俊隆朝臣

霜枯にうつろひのこる村菊は見る朝ごとにめづらしきかな

右判別為勝

為実朝臣

置く霜のなからましかば菊のはな移ふ色をけふ見ましやは

俊云。前歌。無指事。むらぎく、をさなげなり。次歌は、霜置きつれば移ろへる色も見せずとこそ云ふべけれ。霜置きてみゆといへる事たがひぬ。但し置きたれば久しくありと見ゆと詠めるにや。心得ては勝(に)もやせむ。基云。此歌合させる難は見えねど、歌合の歌とは見えす。なけ歌のやうに

ぞ侍るめる。右歌もさせる事はなけれども移ろふ色をけふ見ましやはといへる、少し云ひなれたる様に侍れば、まさりたりとや申すべからむ。

基俊の評の「なけ歌」は精神のこもらぬ歌(無気の歌)の意であらう。右歌についての俊頼評の前半は誤解である。この歌は現在の事実と反する仮定を現はす「まし」と反語の「やは」を用ひて、現状を二重否定のやうな形で表現してゐるのである。(類型的な歌として、土佐日記の「見し人を松の千歳に見まし、かば遠く悲しき別れせましや」が参考になるであらう。)このやうに、もつて廻つた表現は、今日の眼から見ると実に煩はしいのであるが、作者の気持からすれば、残菊に対する愛情の表現として、一応必然性を持つものとしたのであらう。但し、高くは評価出来ない。

○恋十二番

左俊勝

為実朝臣

わが恋はたかしの浜にゐる田鶴の尋ねてゆかむ方もおほえす

右基勝

時昌朝臣

逢ふことの頼むる人のなき時は世をうきものと思ひぬるかな

俊云。左右の歌同じ程とぞ見給ふる。初歌は些かことなる状なれど、さしてことなし。(おくの歌はさしたる事なし)ある田鶴の尋ねてゆかむ勝と申すべからむ。基云。わが恋は高師の浜の歌猶上に浪といひて高師のとはいはばやとこそ見給ふる。忠房の返しに貫之詠みたるにも、沖つなみたかしの浜とぞよみたる。浜はいづくにもおほかるに、このたかしの浜

の節にて事たがひてすずろに覚え侍る。老いほげにたる心なるに、僻覚えにもや侍らむかし。右歌身をうきものと思ひたらむ、今少しなだらかなるやうに見給ひはべる。

左歌の「たかしの浜にゐる田鶴の」は同音で「尋ねて」にかか
る序詞であるから、さしたる詮索は不要である。高師浜（権津・

高石浜（和鬼）いづれも歌枕である。又、基俊の難も不要である。

「大伴の高師の浜の松がねをまきてしぬれど家ししのばゆ」（分業）
※。「よる浪も高師の浜の松がねのかはくまもなき枕なりけり」
（建保名所集）のやうに、上に浪を云はぬものも、云ふものも、その

例歌は多いのである。さて、この為実の歌、恋の歌として、可も
無く不可も無しと評すべきものであらう。流麗なりズムの心地よ
さと、序詞の使用価値（俊類はこの点を是とし、基俊は否とした）
を認めるかどうかによって、評価が定まる訳である。難の無い歌
としておくのが穩当であらう。

(4)

元永二年七月の内大臣家歌合は、類聚歌合にも、新校群書類従
（第八卷）にも入ってゐる。静嘉堂文庫所蔵の文明九年写本に
は、元永二年七月十三日と註してある由である。類聚歌合とその研究
二〇三頁）判者は藤原顕季であるが、静嘉堂文庫所蔵本・神宮文庫
所蔵本には、又判云として、別の判が追加記入してあると云ふ。
（同前）作者付は類聚歌合では、右方人に「為真」とし、群書類従
では、左方人に「為実」としてある。歌についた名は、両方とも
仮名書きで、左になつてゐる。題は、草花・晩月・尋失恋の三題

で、作者二十二名、各題十一番の計三十三番歌合である。

○草花七番

左

女郎花（かた）いくのぬへばか藤袴（た）ひと野（た）に（た）もあらず（た）綻（た）びにけり

右勝

行くすゑの句ひさへこそゆかしけれ君が干とせの秋の初花（た）

左。歌の詞づかひよからずこそ、ゆゆしくきたなけれ。かく

ろひたる歌におもひけるにや。よのきず（た）にこそ。右のうた、
心かしこし。又すぢかはる事なし。よりて右かつ。

左の歌は、女郎花——藤袴、幾野（幾幅）——一野（一幅）、ぬへ

ばか——綻びにけり、と云ふ具合に、相対的用語と、懸詞・縁語
の頻繁な使用が興味本位になつてゐて、決定的欠点をさらけてあ

る。判詞もその点を指摘してゐるのである。「かくろひたる歌」
と云ふのは穩し題の歌のことで、作者がそのやうに、題を受取つ
たのかと非難してゐるのである。

○晩月十一番

左持

ゆふづくよ関の小川に宿らずば立ちどまりても人の見ましや

右

山の端にをしむもしらぬ夕づくよいつ有明にならむとすらむ

左歌。べちにそのこととあるなむ見えす。右歌は、ふる歌と

こそおも「う」給ふれ。まことに今はものもおほえずまかり

なりにたれば、ひがごとなくば持と申すべし。山のはもあか
でいりぬるゆふづくよいつ有明にならむとすらむ。かやうに

ぞ思ひいだされはべる。何の歌にかわが^{イわかまきひとは(類聚はナシ)}かまへおほえ侍らむものを(や)。^{イイナシ}「たづね失ふ事本ノママ」

判詞の末が不完全のやうである。左歌の「見ましや」の「まし」は現在の事実^イに反する推量であり、「や」は反語である。「関の小川」は逢坂関のほとりを流れる小川で、「音羽山もみぢ散るらしあふさかの関の小川に錦おりかく」(源俊頼。金葉集卷第三、秋歌)「夕されば玉ある数も見えねども関のを川のおとそ涼しき」(藤原道経。千載集卷第三、夏歌)など詠まれてゐる。「宿る」とは夕月(夜)が映ることの擬人的表現である。さて、この歌、別に難はなく、一通りに詠はれてゐるが、又全く常識的で、何ら新しい視点もなく、感動の質にも特殊性はないのである。平凡な作品と云ふより仕方が無いと思ふのである。

○尋失恋二番

左勝

ためざね

たづねかねゆきけむかたもしら雲の心空なるこひもするかな

右

ときまさ

なほざりにみわの杉とは教へきて尋ぬる時は逢はぬ君かな

左歌。なだらかなり。右歌は、三輪の杉とをしへおきてければ、うしなひたるにはあらざるなり。よりて左かつ。

左の歌、第三句までは「心空なる」にかかる序詞である。そして、題意をこなし^イてゐるので、所謂有心の序となつてゐる。「しら雲」は言ふまでもなく、「白雲」と「知らず(知られず)」の意を含めた懸詞である。特にすぐれてゐると思はれないが、流麗調で、気持よく詠ひながしてあり、リズム感がよいので、判詞

にもその点を認めてゐる。

(5)

関白内大臣家歌合は、保安二年九月十二日に行はれた。山月・野風・庭露各七番及び恋十四番の計三十五番歌合である。作者は十四名、為真は作者付に「藏人修理亮為真」と出てゐる。新校群書類従本に「為真貞敷」としてあるが、その註は無くもがなのものであらう。判者は藤原基俊であるが、益田家本類聚歌合には、裏書として別筆の追判があり、袋草紙遺編所引の抄出によつて、この追判は源俊頼であることがわかつてゐるのである。新校群書類従本では、両判をつづけてしまつた為^イに、区別の判りにくい点がある^イので、ここでは、類聚歌合によつて抄出し、類従本を校合しておく。

○山月七番

左持

親隆

みわのやますぎまもりくるかげみれば月こそ秋のしるしなりけれ

右

為真

いこまやまこしげきものをいかにしてたにのを河に月のすむらん

このうた、左右かちまけさだめがたし。

(裏書)左右ことなる難なし。仍為^イ持。

「いこまやま」は、大和の生駒山である。「すむ」は「住む」即ち月光の映ることと、「澄む」とをかけた懸詞である。「住む」

は擬人法であり、従つて「木繁きものを」にも、その気持を通はして、全体に、月に対する親近感を持たしめようとしてゐるのである。特にすぐれてゐるとも言ひ難いが、難の無い点を認めるべきであらう。「……ものをいかにして」は理智であるが、感興を破つてゐない。むしろ、かうした発想によつて、美を受取らうとしてゐるのである。

○野風四番

左勝

親陸

うづらなくかたのにたてるはじめみちぢりぬばかりに秋風ぞふ

右

為真

秋風のをばなふきまくゆふされば野辺には雪のふるかとぞみる

左歌、はじめみちこそ、むげにみみなれずことあたりしうは
べれ。ははそかへでなどをきて、^(類従)はじめみちをしも思より
はべるこそ、いとおもひかけず。たとひよむいるなりとも、
はじめのみちなどやよむべからん。のもしなきがいみじうこ
とたらぬやうにおんえは^(類従)べるに、又右歌の、をばなふきまく
といへる、ふるきうたにもかくよみたらんをばなのうたまだ
みはべらず。しものくに、のべには雪のふるかとぞみるとい
へるも、花の風にちるをこそ雪とぞみる^(類従)などはよみはべれ。
秋のをばなの雪とよみたる古うたこそ、えみいでべらね。
あしの花をぞ、からうたには雪によそへてつくりてはべるか
し。かみしもに二義あれば、まことにをばなふきまくるにこ
そはべめれ。

(裏書) 左歌、はじめみちぞあたらしきやうにきこゆれど、
うたざまあしくもみえはべらず。

右歌、をばなを雪のふるにたりとよめるうたありや。また
をばなをば、まねくなどこそおほくよみならへれ。吹きまく^(類従)
とはいかがあるべからむ。方人申云、さくら吹まくとよめる
うたはべれば、などかきもよそへはべらざらん。判者云、さ
くらふきまくといふは、はなのちりたるががぜにまきあげら
^(類従)なしてたるなり。をばなはさやうに風にまきあげらるべきもの
かは。されば、陳申証歌その義ことなり。仍左まされりとみ
ゆ。

(註) 類従本は、歌詞も判詞も「はじ」を「はぢ」としてゐるが、誤である。一
々記さなかつた。

両判とも、右歌の用語を難じてゐる。実景ではなく、観念的に
構想し、その組み立てられた形象に美を見出さうとしてゐるの
で、受容の側に妥当と思はせるもの——古典的先例の有無が当然
問題となるのである。であるから、この歌が、この様に非難され
るのはやむをえないのである。二句切になつてゐる点に基俊が注
意して、上を実景として受取らうとしてゐるのは無理である。形
の上では一応二句切になつてゐるが、これは気持の上では第四句
に続いて行くので、「ゆふされば」が、又一つの時間設定の条件
として、挿入句のやうに入り込んでゐるのである。そして、この
「ゆふされば」の条件法があるために、「野べには」とわざわざ
「に」を置いて全体を説明調のものにしてしまつたのである。
(この一首、夫木抄にも掲載してある。)

○庭露六番

左持

親隆

つゆしげみさこそこひするやどならめたまぢるにはとひとやみ
るらむ

右

為真

みどりなるたまぬきちらすこちしてこけむすにはにけるあ
さつゆ

左歌、つゆしげみさこそこひするやどならめといへるこぼ
こそ、つづきもなきやうにはべれ。又つゆしげきやどには、か
ならずこひすることにはやはあらん。又玉ぢるにはもいとおど
ろおどろしう。されば露のたまにはあらで、いづみしきぶが

きぶねにまいりてよむうたに、ものおもへばさはのほたるを
わがみよりあくがれにけるたまかとぞみる、御かへし、おく
山にたぎりておつるたきつせにたまぢるばかりものなおもひ
そとはべれば、たまぢるといふことは、つゆのうたかなひた
りとおほえはべらず。右歌、しそく五寸がうちに十首など
よむうたのこちしはべれば、あしよしまうすべきほどにも

はべりぎめり。されば、ぢとや申べき。
神(類徒)
明(類徒)

(裏書) 左歌、たまぢるとよめる如何。貴布弥神明託宣、和
泉式部歌に、たまぢるばかりものなおもひそとよめるに、お
もひよそへたるか。それはたましひぢるとよませたまへるな
り。されば、つゆにはいかがあるべからん。方人申云、露は
玉ににたり。涙も玉ににたりとよめれば、その難いかがはべ

るべからん。判者、なをかたぶかかれて、持とぞみゆると申。
右歌、ことなるなななければなり。

右歌について、基俊は速く詠み流した即詠のやうだと評し、俊
頼はさしたる難が無いと云つてゐる。この両判は簡単であるが、
よく當つてゐると思ふ。昔の縁を透かす朝露と云ふことで、題を
手軽くこなしした歌である。美しくはあるが、特にすぐれてゐると
も思はれない。平明で、もたもたしてゐない点が良いが、「心ち
して」は、やはり説明の弱さに陥つてゐるのである。

○恋八番

左持

親隆

こひをのみすまのうらなるはまひさぎたれかはしらぬしほれた
りとは

右

為真

よどがはのふちにわが身はあらねどもこひのすみかとなしにけ
るかな

此歌、左右みぐるしからずはべめり。見どころあるこちぞ
しはべる。

(裏書) 左歌、々がら優也。右歌、有念。さればぢとす。

両判とも認めてゐる。俊頼判の「有念」と云ふのは、今日の
言葉で云へば、真情がこもつてゐると云ふことにならう。この
歌、「こひ」に恋と鯉とを懸けてあり、従つて上句が譬喩となつ
てゐるが、末句の「なしにけるかな」の思ひ入れがある為に、浮
いたものとならなかつたのである。

○恋十二番

左勝

親隆

こひしなでこころづくしにいままでもたのむればこそいきの松
ばら はイも(類従)

右

為真 (具類従)

あしのやのかりそめぶしはつづくにのながらへゆけどわすれざ
りけり

左の、心づくしのいきの松ばらは、あしのやのかりそめぶし
には、こひの心もうたのすがたも、まさりてぞおほえはべ
る。

(裏書) 左歌、すこぶるよろしくはべり。右歌もよけれど
も、なを左勝とや申べからん。

右歌は、為真の歌で、千載集に採られた唯一の作である。「芦
の屋の」は「仮初め臥し」の仮初めにかかる枕詞、「津の国の」
は地名を長柄と云ふためのものであり、「ながら」は地名である
が、「長らへ行けど」を云ふ為の懸詞である。そして第一・二句
の關係と、第三・四句の關係は、形の上の類似性を持たせられ、
内容的にコントラストをなしてゐるやうに、仕組まれてゐる。こ
こにこの歌の主な興味のあるところがある。過ぎし日の恋の思
ひ出を、器用に詠つただけと云へば、正にその通りであるが、当
時の風としては、かうした発想は不自然ではなかつたし、「なが
らへゆけどわすれざりけり」に、恋に対する情熱の深さと、それ
が過去のものとしてしか受用し得ない者の悲哀が打裏されてゐる
のであって、モノローグ体のしみじみとした味はひを認めうるの
である。

(6)

南宮歌合に一首見える。(新校群書類従第八卷)

十一番 女郎花恋

左

為実肥前司

あだなりといはれの野への女郎花など我にしも離かざるらむ

右

兵衛君

みをつめば哀れとぞ見る女郎花人もこそ野の露にしをるる

為実の歌、「いはれ」には、磐余(天和国高市郡)と言ふ地名と
「言はれ」とが懸けてある。ただそれだけの技巧で、女郎花を女
性の象徴として詠つたにすぎず、高く評価することは出来ない。

もっとも、「女郎花恋」と云ふ題に対する答案としては、一応
これでよい訳で、当時の風に従つた普通程度の作ではある。しか
し、これが純詞花和歌集に、「寄草花恋のころを」として採ら
れてゐる所を見ると、このやうな歌に対する当時の見方と云ふも
のは、今日のわれわれとは、よほど違つてゐたことが判るのであ
る。

(7)

詞花和歌集卷第九、雑上に為実として、左の一首が出てゐる。

これは後葉和歌集卷第十六、雑一にも載つてゐるが、群書類従本
では、作者を為実として、書陵部所蔵写本によつて、為実と校し
てある。(新校群書類従)

父永実信濃守にくだりけるに、共にまかりてのほりたり
ナシ(後葉)

ける頃、左京大夫頭輔が家に歌合し侍りけるに、よめる。

藤原為実

名に高き姨捨山も見しかども今宵ばかりの月はなかりき

この歌、どう言ふ題であつたか判らないが、歌合の歌としては、率直すぎる程率直な歌である。勿論、歌合の歌としても、かうした歌ひ振りのものが無い訳ではあるまいが、詞書が無ければ挨拶の歌のやうに受取られるものである。(この歌を含む歌合は伝はつてゐないらしい。) 歌の意は明かであり、素直な表現に好感が感じられるが、さしてすぐれてゐるとは思はれない。集にとられたのは、歌の背景になつてゐる、姨捨山の月を実際に見たと言ふ作者の体験に対する羨望―歌枕についての歌人仲間の興味に比重が置かれてゐると考へられるのである。それは又、作者自身の「見しかども……なかりき」と云ふ、割り切つた言ひ方の底にも伺はれるのである。

この歌については、なほ附記しておきたいことがある。文治二年十月二十二日の五題八十五番の歌合(桂宮本叢書第十四卷所収)に於て、この歌が、但馬の「てる月はをばすてやまもことぶりぬこのやどにてぞみるべかりける」に関する判詞に、証歌として引かれてゐるのである。そして、そこには歌合の場合と撰集の場合とで、歌をあつかふ態度が異ると云ふ意見が述べられてゐる。少し長いけれども、次に引用しておく。

右歌、月をよまむに、をばすてやまをそしらむことうちまかせずなど人く侍り。まことにおもふたまふるに、後拾遺に為仲朝臣が、こしよりのほるに、をばすて山のふもとに

て、月を見てよめるうた、これやこの月みるたびにおもひやるをばすて山のふもとなるらん とよめり。されば月をみむには、をばすて山をば思いつべきことときこゆ。ただし、為実ち、永美にくして、しなのへまかりてのほれる、すなはち故左京歌合に、ななたてるをばすてやまもみしかどもこよひばかりの月はなかりき とよめり。これぞかのやまをそしれる歌にて侍。件歌合未判なれば、勝負しりがたし。うちまかせて歌にはかやうのことはいかがおもふたまふべしかば、そのよしは申いで侍にき。その為実がうたは詞花集にいれり。歌合と撰集とは、ことかはるにや。歌合には毛をふくことにや。撰集などにはこのほどのことに、うたがらめづらしければゆるし侍にや。左の雲の難あながちのことならずは、をばすてやまをそしれるいかがとて、左勝侍りぬ。

(8)

中宮亮頭輔家歌合(長承三年九月十三日)は、群書類従に収められてゐる。題は、月・紅葉・恋の三題で、各十二番、計三十六番の歌合で、判者は藤原基俊である。歌人付には前肥前守為真となつてゐる。

○月八番

左

太皇太后宮大進忠兼

更科の山路にさける白菊の花のまばゆき秋のよの月

右

前肥前守為真

空晴れてきける雲だになき夜半に月の桂の影のみぞする

左歌。更科の山路にさける白きくはとよめる、未開_三本文証歌。年頃は、更科にはただ慰めがたき月照る所とのみぞ知りて侍る。更に菊咲ける所とは承らず。若し山路の菊の露のまにと詠めるふるごとなどに覚し渡りて被_レ詠たるにや侍らむ。彼は仙家の菊なり。更非_二俗境之菊_一。又花もまばゆきと被_レ詠者、はなのまばゆからむするか。人のまばゆからむするか。

此事度_二両端_一。未_レ知_三正説_二耳_一。右歌。語似_レ近_三人耳_一。又叶_二物情_一。依_レ月詠_三桂影_一者、是詩歌の常の事也。仍以_レ右為勝。右歌、判詞に述べてゐるやうに、最も常識的に月光の美を歌つたにすぎない。特にすぐれてゐると思はれず、末句の「影のみぞする」は如何とさへ思はれるのである。ただ一直線に歌ひ下した点は、この頃の歌としては、素直さをとれば、とれると思ふのである。

○紅葉八番

左

忠兼

散りぬべき小島が磯のみちぢばにあらくもよする沖つ白波

右

為真

山城のこまの山べのみぢ葉を唐錦とや人は見るらむ

左歌。詞義頗似_レ有_レ疑。小島磯には紅葉ありとよめる証歌侍らむや。但歌云。まつ島やをしまが磯にかづきせし海人の袖こそかくはぬれしかといへり。若依_二此歌文者_一、彼詞頗_レ詐偽欺者。非_レ可_レ指事也。右。山しろのこまの山辺の紅葉ばをから錦とや人はみるらむといへり。山城のこまの山をば、昔かのうりふ山といひて、瓜つくる所とこそ聞えわたり

て侍りつれ。紅葉するとは、されば、山城のこまのわたりの瓜作りとなりかくなりなる心哉。となむよみて侍り。古歌に、をしまが磯にもみぢすとよめるふる歌も見侍らず。松島やとぞ詠みつたへて侍る。又、こまのわたり、紅葉よめる歌も見えず。ただ瓜つくとぞよみて侍れば、此左右歌辞義共闕。仍為_レ持。

判詞に、狛(山城国相楽郡)を瓜の産地と云つてゐるのは、惟馬楽の「山城の狛の渡りの瓜つくり吾を欲しと言ふいかせんなりやしなましうりたつまで」以下、さうした歌の多い為めに言つたのではあるが、言ひすぎであり、余りにこたはつてゐる。「紅葉せぬこま野の山のとときは木も秋は下葉にけしきつくらし」(惠慶)「やまとともからとも見えず山城の狛野にさけるなでしこの花」(頼信)と云ふやうな歌もあるのである。しかし、この為真の歌は、さうした点を別に考へても、決してうまい歌とは言へないのである。狛と唐との言葉の上の単なる興味であるにすぎず、紅葉を唐錦と見るのも、極めて陳腐である。

○恋八番

左

忠兼

あまたとかよるはのたなは君によの乱れがちなる我が心かな

右

為真

ひたぶるに思ひたえてもあるべきにあなむつかしの心情や

左歌。よるはのたなはといへるわたり、詞甚だしいやしうてき、所侍らず。雖_レ然末句はいひなれたるやうに聞え侍り。右歌。已存_二俳諧之跡_一。尤為_二詭誕_一。兩首程自由。仍為_レ持畢。

俳諧之躰と云ふのは、詠風のユーモラスである点を指し、誑誕は、表現の大げさであることを言っているのである。なるほど、この歌は、判詞の通りで、深い味はひと言よりは、さうしたねらひで詠んだものであらう。さうすれば、下句は仲々軽妙であり、一応成功を取めたものとするのが出来よう。

(9)

今撰集には、春二首、恋二首の計四首がとられてゐる。

二条大宮にて雨中鶯といふ事をよみ侍りける

肥前守為真入道

うぐひすの梅の花がさちりぬればふる春雨にそほれてぞ鳴く
二条大宮は、二条大路と大宮大路の交叉する辺を指すのであるが、誰の邸であるか、未だ考へ得ない。末句の「そほれて」は「そはたれて」(濡れて、ぐしょぐしょになる意)の誤用ではないかと思はれる。「そほる」は戯れる意であつて、それであるとする、意をなさぬことになる。この歌、題詠ではあるが、実景のやうに詠みなしてある。ただ、梅に鶯、しかも鶯を擬人して、「梅の花がさ」を言ひ、雨と笠を縁語仕立にしたところが、今日から見ると、いや味になつてゐる。しかし、当時としては、さうしたことはあたりまへで、難とはならず、かへつて自然なものと考えられたのであらう。かうした点の常識を認めれば、一通りの出来の歌とすることが出来るのである。

為真入道

春くれば笠つづき咲くさくら花かざしにさせるみよし野の山

平凡な歌で、何のとりえもない歌であるが、「かざしにさせる」と云つて、擬人法にしたところが、ミソであり、当時の好みであつた歌である。

大殿にて恋歌よませ給ひけるに

為真入道

あふことのなきを浮田の杜にすむ呼子鳥こそ我が身なりけれ
全体がなだらかではあるが、譬喩に仕立て、浮田の杜(山城)に憂きを懸けた懸詞を使つてゐるあたり、常套的手法であつて、特に見るべきものは無い。

題しらず

あぢきなく君をしらせし人をさへつれなき度に恨みつるかな
前の歌に並べてあるので、作者名は無いけれども、為真の歌と認められる。この歌、心理の屈折を、かなりの程度にまで詠み得てゐる。ただ、初句が浮いてゐるのは惜しい。しかし、当時の詠風としては、かうした主観の句を冒頭に置いて、特定の句にかかると同時に、一首全体に気分を揺曳せしめる方法が、よくとられたのである。この点を認めれば、一応成功した作品と云ふことが出来る。

(10)

中宮亮重家朝臣家歌合は、永万二年に行はれた。題は、花・郭公・月・雪・恋の五題で、各十四番、計七十番歌合である。作者付によると、「生西為真入道」となつて居り、番へた相手は、いづれも従兄弟の西遊齋入道であつた。(別稿「藤原範綱小論」参照) 判者

は、前左京大夫頭広朝臣、即ち俊成である。

○花十二番

左持

西遊

さざ波やながらの山の峯つづき見せばや人に花のすがたを

右

生西

風ふけばみふねの山の桜花しら波かくるここちこそすれ

左。こと葉つづきいひしりて、やすらかにきこゆ。右。みふ

ねの山しら波かかるなどいへる、たくみには見ゆるを、しら
なみかくるほどぞ、いかにぞやきこゆれど、歌のさま持とみ
えたり。

「みふねのやま」は、万葉集に、三船乃山・御舟乃山と出てゐる。大和国吉野郡で、丹生川上中社の東にある馬ノ瀬の東に聳える山峯であると云はれてゐる。舟と白波の縁語仕立を、判は一応認めた上で、落花風にまふ景としてはどうかと云つてゐるのである。言葉のあやによって、美的イメージを組立てることは、当時の慣用法であり、それがこの歌で成功してゐると見るか、失敗してゐると見るか——末句の説明を肯定するか否かに関連する訳であるが、私見では、余り高く評価は出来なと思ふ。末句の説明が、全体の流動を遮断してしまつたと思はれるからである。低度の譬喩に近づけてしまつたやうである。

○郭公十二番

左持

西遊

時鳥しのだの森の忍びねはきち行くわれぞまづはききける

右

生西

とどまらむところをしへよ時鳥たづねゆきつつ又もきくべく

左歌。信太森のしのびねはなど、うためきて聞ゆるに、きち

行く我ぞとなれるほどや、なだらかにしもきこえざらむ。

右のうたは、たづねゆきつつ又もきくべくもなど、あまりた

しかなるやうにぞきこゆれど、はじめよりただことばにいひ

くだして、理つよくみゆ。左は、きちこはけれど、万葉集な

どもにもいへることなれば、信太森も打ちすぎがたくて、これ

もまた持と申す。

右の歌、ひたむきに言ひ下してゐて、よいと思ふ。当時として

は、その一筋さが、かへって、「あまりたしか」すぎると思はれ

たのであるが、この率直な表現は、かへって買へるのではない

か。「理つよくみゆ。」は、この場合、非難の語ではなく、感動

の強さを認めての評であらう。無名抄に「拾遺のころよりぞ、其

の体、ことの外にものちかくなりて、ことわりくまなく顯れ、姿

すなほなるをよろしとす。」と云つてゐる所から推すと、この歌

などは、やや古風な詠風として部類されるかと思ふが、一応認め

てよい作である。

○月十二番

左勝

西遊

はつはつに山の端出づる月みればいかにすべきか入らむ惜しさ

を

右

生西

池水の底に紅葉の散りしけばやどれる月もあかきなりけり

左の、月の山のは出づるよりいかにすべきか入らむ惜しさを

といへる、あまりさへぎりてやあらむ。空にすむまもなほ哀れにもめでたくも侍れば、これは、二山之間谷底にてみたる心地やすらむ。右は池水の底にもみちの散りしけばといへる、又いかが。水にちりしく木の葉は、池にも河にも浮ぶものなり。されば、石などの心ちやすらむ。又月もあかきなりけりなどもおろかにきこゆ。ふるき歌にはときふよめれど、なほかやうの詞はよく用意すべき事なり。左は出づる月をみむに、入ることのおほえむなどかはおほゆれば、左かちとすべし。

右歌、着想が如何にも幼稚であり、しかも、単なる思ひつきに終つてゐて、感動がこめられてゐないのである。低い歌である。

○雪十二番

左勝

西遊

かきくらし越のかたみち降る雪はいつはた山を思ひこそやれ

右

生西

よの常は雲の衣をこしまくたかまの山は雪降にけり

左。こしのかた道いつはた山など、なつかしきさまにはきこえねど、またかかる歌にてはさてもありなむ。右は、いとめづらしくこそみえ侍れ。但この山をば、よそにのみ見てややみなむかづらきやたかまの山の峯のしら雲などのみこそききならひぬるを、これは、雲の衣をこしまくといへる、それよりかみおもひやられて、山のすがたもよろしからずやきこゆらむ。かのまがねふくきびの中山帯にせるなどいふやうなる事のあるにや。よもゆゑなくはあらじを、え見およばぬこ

とにて、驚き思ふ給へるこそいとくち惜し、されどこしにまくとは猶姿もいかが(は)。いつはた山を勝と申すべし。

右の歌について、評は、その描写の奇抜すぎたことを難じてゐる。評も少しこたはりすぎてゐるやうではあるが、歌も具合が悪いと思ふ。「よの常は」と言ふ言ひ方も変であるし、「雲の衣をこしまく」の擬人法的表現も、末句の「雪は降りけり」と接合せしめられると、わざわざさうした言ひ方をした意味が、曖昧になつてしまふ。むしろ、ただ常は雲居る高間山に雪が降つたと、素直に詠ひ流した方がよいのであるが、それでは、当時の詠風としては物足りないとしたのであらう。妙にひねつて、歌柄を低俗にしてしまつた歌である。

○恋十二番

左

西遊

我が恋はかけおふ鷹にあらねどもあふ事ぬるき頼みをぞする

右持

生西

老ぬれば錦木をだにえそたてぬ千束こるべきよはひならねば

左の歌。かけおふ鷹、あふことぬるきなどいへるけしき、ただならでをかしく侍る。右。としのほど思ひしりながら、なげきなやめるけしき、あはれにも侍る。ちかくかやうなる事きし心地すれど、ひがおほえにや侍るべし。(うちづかこるべきなどいへる)、すがたなどをかしくみて侍れば、右勝とすべし。

判詞によると、右の勝であることが明かであるから、右の歌に「持」とあるのは、誤記とすべきであらう。(持の場合は、左に

書くのが普通である。この歌は、詞花和歌集巻第七、恋上の、

堀川院の御時百首の歌奉りけるによめる

大蔵卿国房

思兼ね今日たて初むる錦木の千束もまたで逢ふ由もがな
を本歌としてゐる。判詞に、「かやうなる事」と云つてゐるの
も、この歌を指したのではあるまいか。千載和歌集巻第十二、恋
歌二の、

題しらす

賀茂重保

錦木の千束に限なかりせば猶こりずまにたてまじしものを
は、生西の歌より後であらうと思はれる。錦木は、一尺程の五色
に彩つた木で、男が思ふ女の家の門に立て、女が同意して取り入
れるまで、立て添へると云ふ習俗で、千束はその数の多いのを言
ふのである。この歌、老いて恋もなし得ぬ嘆を詠つたものであつ
て、今日としては大して興味も持ち得ないが、当時としては、か
うした詠出も、相当に評価されたものと思はれる。さうした目で
見ると、しみじみとした情趣も添つてゐて、一通りの作と認めら
れるのである。

(11)

続詞花和歌集は、詞花和歌集の撰者頭輔の子清輔が、二条天皇
の勅によって撰じたものであるが、天皇の崩御によって、勅撰集
の列には加へられずに終つたものである。(俊成の正治奏状に
は、清輔が私に撰して、勅撰に准ぜられんことを請うたが許され
なかつたと見えてゐるが、これは六条家に対する御子左家の讒説

であらう。この集に為真の歌が二首見える。

寄草花恋のころを

藤原為真

あだなりとはいはれの野辺の女郎花など我にしも離かざるらん
この歌は、南宮歌合の歌と同じである。

○

ふみをかくす恋のころをよめる

藤原為真

こひしれとかきてもあらむ玉章を人めにつつむ程ぞわりなき
題意は、自分に恋文を渡さうと持つてゐる女が、人目をばはか
つて、それを出しかねてゐる時の心持と云ふことである。歌上句
は説明に墮してゐて面白くない。「わりなき」は、受取るべき自
分の受取ることの出来ぬ時の氣持を指したものである。全体が題
意をただ忠実に述べたにすぎず、説明勝ちで、余情に乏しいの
は、具象性に欠けてゐる為である。

(12)

夫木和歌抄には、為真の歌と見られるものが六首存するのであ
るが、その中の四首は、既述のものと同重なるので、省略する。

○

をじかふすとふ火の野辺のしの薄ほにいでん秋も近づきにけり

藤原為真

これは巻第九夏鹿に出てゐて、頭註に「承安三年経正朝臣歌合夏
草判者俊成卿」とあるものである。この歌合は、散逸したらしい。

この歌の「とぶ火は」大和国添上郡で、古来の歌枕である。

「しの薄」は細竹しぬの叢生するものを言った語であるが、それがた

だ薄を指すものとして用ひられることもあるので、ここでも薄である。「ほにいでん」は「穂に出でん」で、薄の穂の出ることである。

上から「野辺の」までは、「しの薄」を言ふ為の序詞のやうになつてゐる。そして、その為に、「をじかふす」と「ほにいでん」の関聯から、いささか恋の歌に似た艶なる気分のただよふものとなつてゐるが、これは作者の意図にはない筈のもので、歌合の題の「夏草」についての歌としては、かうあるべきではなく、この点はむしろ難点にさへなるであらう。しかし、この歌、全体になだらかで、気持が一本に通つて居り、秀作と認めてよいものである。もつとも今日の眠から見れば、実況が余りに絵画的に整調されすぎてゐると言ふ難が出るかと思ふが、当時としては、これはこれでよかつた筈である。

よをへつ ついなみ野に立さをじかは何をかひよと鳴あかすらん
藤原為真

これは、巻第十二鹿に出でて、頭註には「保延元年八月家成卿歌合鹿」とある。藤原家成は正二位中納言で、詞花集に、二首載つてゐる。この歌合も散逸したらしい。

「いなみ野」は印南野（播磨国）で、歌枕であるが、「よをへつ つ」と言ひ、「何をかひよと」と続くので、「否む」の気持を懸けてあるものと思はれる。そして、その為に、全体が頗る理つめの構成になつてしまつて、情味の乏しい点が残念である。

(13)

私が先に藤原範綱を論じ、今ここに藤原為真を見るのは、これらの歌人としての価値を賞揚しようが為ではない。むしろ反対に、当時としても第二流・第三流と見られた人々のそのままの歌を見たからである。平安朝末から鎌倉へかけての時代の動きは、文学の、特に和歌の世界にも、大きな転換期を形づくつたのであるが、従来はそれをリードした人々や、作品集として選ばれた勅撰集にのみ注意が向けられ、いかにも小綺麗に整頓された姿で、所謂和歌史なるものが書かれて来たのである。それにはそれで十分に意義があつた訳ではあるが、さうした上層の進展相の下に、数百の凡庸歌人の存在したこと、これらの歌人のあはれにもたどたどしい歩みが、実はきらびやかな上層を支へる歌壇の土台となつてゐたことに、目が向けられてゐなかつたやうに思ふのである。凡庸なるものは結局凡庸なるものとして、見棄てられる運命を荷なふのも亦当然ではあるが、さうした人達の存在も亦事実として認めておかなければならず、その凡庸さが如何なる様相のものであるかを明かにしておくことは、必ずしも無駄ではないのである。故に藤原為真と云ふ受領家の小歌人、歌壇の下層となつて永遠にうづもれ去るべき小さな存在を、小さきは小さきままのものとして、ここに取り上げてみたのである。